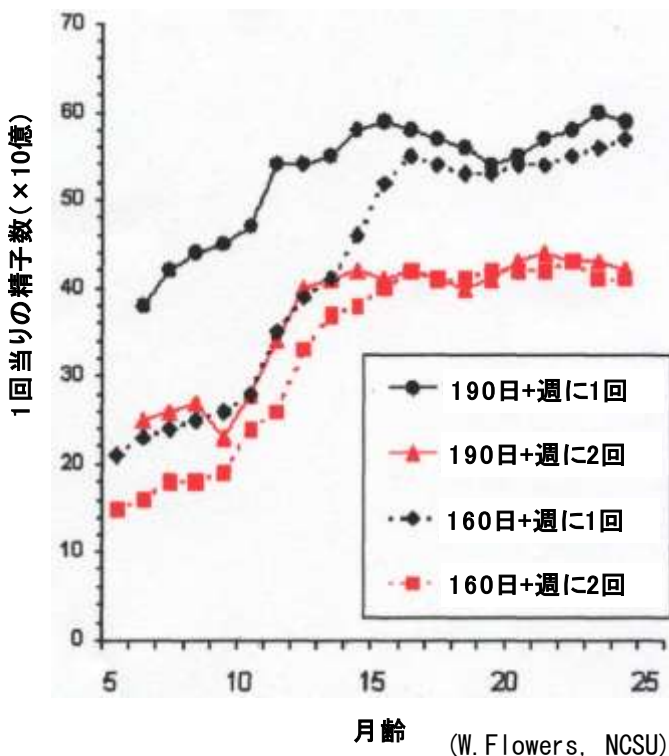


雄の能力は筆下し方で決まる

雄にとってとても苦手な暑い夏が続いていますが、暑熱ストレスへの対応は最も悩みの種ですね。環境改善などでの対応、すなわちファンやダクトチューブ、ミストやスプリンクラーなどがごく一般的ですが、最も警戒しなければいけないのが、暑熱ストレスによる精子の異常や活力低下です。AIを実施している農場では、日常使用前に調べていることと思いますのでその問題は解消できます。これは自分で採精していても、外部導入の精液に対しても全く同じです。必ず精子の活力、異常などをチェックして良いものだけを使いましょう。

前置きはさておいて今回は雄の筆下し方法の話です。一般に雄は 10 カ月、あるいは 12 カ月令くらいから使い、その頃になれば週 2 回のペースでも問題なしといわれていますが、実際にデータとしてはなかなかありません。探して見たら面白いデータがありましたので紹介します。遺伝的に同じ資質の雄豚の筆下し、すなわち初回採精の時期を 160 日令(5 か月少し)と 190 日令(6 か月少し)の 2 つに分け、その日からそれぞれ週に 1 回採取するものと 2 回採取するグループに分けて、1 回あたりの総精子数を数えて 24 カ月令(2 歳)までモニターしてみた実験です(AI 雄豚の平均的な数字からすればかなり悪い数字になっているのは筆おろし後の使い方が性急すぎるのかもしれませんが。ちなみに成雄の 1 回採取あたりの精子数は品種にもよりますが 600 億から 1300 億くらいと言われています。ホドソン氏情報 先月号)。

初回採精(160、190)日令と
採精頻度(週に1、2回)の精子数への影響
(24ヶ月令までみたもの)



黒線が週 1 回ペースのグループ、赤が週 2 回採取のグループです。190 日令から始めた群で週に 1 回採取したものと、2 回採取するものとの大きな差が出ています。つまり 190 日から筆下しして週に 1 回ペースでこなしていった豚が、この中では一番安定的な精子生産を継続していました。約 1 カ月早めに、しかも週 2 回のペースで採精を続けると適期の 12 カ月令になってもわずか 250 億個しか採取できていません。そればかりか 2 歳になっても 400 億がせいぜいで、190 日から始めた豚に比べると 70%ほどの能力しか発揮できていなかったこととなります。日常ではなかなかありえない状況下での試験ですが、ゆっくりと 12 カ月令くらいを目処に精子が増産されていくことも認識して欲しいポイントです。

一般に 12 カ月令くらいからあせらずじっくり使い始めよと漠然と言われていますが、これをデータである程度客観的に示したのものとして評価できます。本格的な雄豚使用は 12 カ月令からにしましょう。

なぜ 160 日、190 日で試験をしたかはわかりませんが、短気なアメリカ人ではよくあるケースなのかもしれません。最初はもっとゆっくりとペースダウンすればこんなこと(造精能力の減退)にならなかったのではないかとと思われる方もいると思いますが、記録もなければ検証すらできません。実験では少し極端な例で基本管理を訴えたかったのではないかとされます。ごく若令からの酷使(週に 2 回はたいへん酷使なのです!)は厳禁です。



離乳母豚を求める活力ある雄豚

結論として、雄が使えるかどうかを早く知りたいのはわかりますが、それでも少し余裕をもって 8 か月令から筆下しを始め、月に 1 回くらいのゆっくりしたペースで総精子数の増加をチェックします(AIセンターならこの点が非常に重要、自己採精の場合でも慎重にやっていきましょう)。そして本格的な採精は、12 か月令から週に 1 回の定期的な採精で継続する方法が最も推奨されます。

品種にもよりますが、ごく一般的な止め雄であるデュロックの精液濃厚部は 100～200 ml 足らずです。精子数をカウントし、総精子数を出す習慣を作りましょう。

8 ヶ月くらいから月 1 回でグラフにするなどしていけば、雄の健康管理にも役立つこと間違いなしです。